

# ザ・ロングバケーションズ

タイトルマシン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

休暇を言い渡されたプリユムとサルゴンのロドス事務所に引きこもる男の話

目次

休暇のはじまり	1
ホワイトノイズ	6

## 休暇のはじまり

「はっ？」

自分で発しておいて、なんとも気が抜けた声だな、と彼女は思った。彼女が護衛隊で鍛えられたものは戦闘技術だけではない。

例えばラテラーノのどこかの門扉の前に立っていたとしたら、例えどんな気が散る出来事が起ころうと微動だにしない自信があった。それが任務や市民の安全に関わることでなければ。

彼女は珍しいことに、無意識にベレー帽へ手をやりながら目の前の小柄なフェリーマンを見た。

ロドスの汎用制服である翡翠色のラインが入った黒いジャケットをきちんと着込む、きやしやな体つきのいかにも文民然とした女性である。

最初、ロドスに居場所を見出だそうとがむしやらだった頃、ドクターの護衛に付きたいとの希望を出した際に斡旋に当たってくれた人事部のオペレーターが目の前の人物であったから、その顔はよく覚えていた。

「ですから、三ヶ月間の外勤任務に出ていただくことになりました。お伝えするのが急になってしまい申し訳ありませんが、内容としてはほとんどお給金が出る休暇と申っていました構いません。すぐ出発というわけでもありませんので……」

「それは、どちらにでしょうか」

あまりの衝撃に彼女の声は掠れていた。握りしめたハルバードを取り落とすことは決して無いが、離れたら崩れ落ちるのは自分の方な気がした。

「サルゴンのあるロドスの事務所です。えっと、こちらになりますね」人事部のオペレーターは指先をタブレット端末の上で滑らせる。すぐドローンが飛行機械から撮影されたであろう航空写真が表示された。

確かに、オアシスから少し外れた赤茶けた砂漠の中、荒涼とした砂丘の頂上に、黒々とした影を伸ばす塔が建っている。

だが彼女にとってはそんなことは重要ではなかった。

蒼白になった顔で、頭上にびよんと立った癖毛を震わせ、言葉を紡ぐ。

「お聞きし辛いのですが、これは、さ、さ、さ……」

「や？」

「左遷なのでしょうか……」

人事部のオペレーターは驚いたように目を見開くと、やや耳を傾け、困ったように微笑んだ。

「ふふ、そんなことを心配していたんですね。後でドクターからも直接説明があるかと思いますが、ロドスは決して力不足のオペレーターを左遷することはしませんよ。ただ……」

言葉を切って、おもむろに視線をタブレットから彼女の背後へと移した。

「ドクターー！」

「やあ」

彼女が振り返ると、中肉中背で黒ずくめの人物が、視線に答えるように軽く手を挙げた。

「言い方を変えよう。君には未知の環境に適応しつつ疲労を回復し知見を深める任務についてもraithたいんだ。頼まれてくれるかな、プリム」

一度そのように言われたら、プリムに断る言葉など無かった。

これまでそのように生きてきたし、護衛隊の職を喪って生き方に迷うようようになってからも、揺らぐことはない信念がそうさせるのだ。

誰かを護るために必要ならば、例え地獄であろうとハルバードと共に駆け抜けよう。そういうつもりだった。

つもりだったのに。

「あ、あとアーミヤとケルシーと私にサルゴンのお土産ちょうだいね。経費で落ちるから」

「これは後方支援オペレーターとしての意見ですが、普通に落ちませんよ。ドクターのポケットマネーでお願いします」

「え……」

三週間後

A. M. 11:30 サルゴン東部

「熱い……」

実際、“暑い”ではなく、“熱い”のだ。彼女が足元の砂を踏みつけるのと同時に、刺すような直射日光が彼女の全身を踏みにじっている。

砂漠に点々と足跡が伸びていた。プリウムは振り返って、思わず唸るように声を出した。蜃気楼の向こうにオアシスがゆらぎ、後は一面の青空と砂漠が広がっている。どうしてこんなことになったんだろう？

ロドスアイランドがサルゴンに最接近する時期を見計らって、飛行機まで出してもらったの快適な送迎だったはずなのに、最終的に徒歩になってしまったのには理由がある。

プリウムはオアシスで下ろしてもらった後、郊外の事務所へ向かうために現地で車を調達した。別に徒歩でも行ける距離ではあるが、休暇を楽しんだり買い出しをするには不便であろうとパイロットに助言されたので、素直に従う事にしたのだ。プリウムは自制の人だが、同時にこういった素直さを自分の美点だと思っている節がある。

ロドスに来てからオーバーワークになるほど外勤を繰り返してきたとはいえ、それ以前はラテラーノから出たことの無かった彼女に、このようなトランスポーターじみた現地調達の経験はない。炎国風に書かれた臨機応変の四文字を頭に浮かべながら、現地の怪しいフルフェイスの商人から中古のクルビア製四駆を手に入れたところまではよかった。

まさかエンジンルームにバクダンムシが巣を作っているとは思わずに車を出発させたプリユムは、砂漠をしばらく走ったのち、座席ごと垂直に吹っ飛ぶ羽目になった。プリユムとて優秀な先駆兵であるから受け身をとって無事であったが、源石通信機が故障してしまったのが気がかりである。

歩けない距離ではないため、とりあえず焦熱の荒野に散らばった荷物をかき集めて背負い歩き出した。だがとにかく熱い。黒い帽子に黒い外套、極めつけに頭にはリーベリの羽毛なのでなおさら熱いのだが、プリユムはあくまで服装を崩さないことにした。

外勤任務の経験に思うところもあり、もう護衛隊の規律に縛られる自分ではない。しかし赴任先のロドス職員は初対面であるから、乱れた印象を与えたくはない。

だが流石に熱すぎる……。そう思った矢先、プリユムは荷物の中の傘を思い出した。サルゴンに行くことを聞き付けてきたトウイエとかいう医療部のオペレーターがにやつきながら持たせてくれた物である。感謝しつつもなぜ傘？と不審がついていたが、砂漠の気候を見越してのことだったのか、と妙に感心しながらプリユムは傘を開いた。その傘は青い空の色をしていた。透明な素材が張り渡されたいわゆるビニール傘と呼ばれる極東発祥の傘は、素晴らしい効率で日光を透過した。

プリユムは流石に憤慨を覚えた。砂漠に雨は降らないと人事記録にも書かれている。

傘を諦め、気持ちを切り替えて、足を進める。汗が流れ落ちて、乾いた地面へ染み込んでいく。

やがて塔の先端が丘の上に顔を覗かせた。

\* \* \*

モーニングルーティンなどと洒落た言葉で表すにはいささか内容

が無いが、男には朝の習慣があった。

まず、朝ベッドで目覚める。朝日に照らされた、研究機材と資料でめちやくちやの自室は見ないふりをするのがコツである。

枕元のコップを適当に洗って、ロドスのロゴ入りのあの電気ポットでお湯を沸かし、インスタントのコーヒーを飲む。

本艦からの連絡を適当にチェックしたあと、郵便受けを漁って新聞を取ってくる。

ついでに一階で飼っている羽獣の卵を二つ取って来て、ベーコンと一緒に焼く。黄身がとろけるくらいが好きだが、男は固くなるまで焼く。先ほどから男と言っているが、その体軀は少年にしか見えない。キッチンで調理をするには適当なラックを台座がわりにしないと届かないのだが、全てを眠そうな目で危なげなくこなす。

塩と胡椒をふり、全てを白い皿に盛る。テーブルについてパンと一緒に食べる。

そして食べながら購読している各国の新聞を読む。特にスポーツ欄の騎士競技の項目とオリジムシレースの項目をしっかりと読む。

合計で龍門幣にして10万負けたことを知る。

あまりのシヨックに黄身が喉につつかえて噎せたところで、ジリジリと音を立ててインターホンが鳴った。

「はあっ はあっ はじめっ…ましてっ…プリユムと申しますっ…以前はっ…」

ホールに立っていたのは、巨大なハルバードを持つ、息もたえだえない一人のリーベリだった。

男は名乗るよりも前にとりあえず尋ねることにした。

「アイスコーヒーとかレモネードとか…飲みますか？」

これがプリユムの長い休暇ロングバケーションの最初の一日であり、そしてこの男の長い休暇の、終わりの始まりを告げる出来事であった。

砂漠にあって塔は日時計のように見える。影はちょうど正午を指す位置にあった。



## ホワイトノイズ

プリユムは借りたタオルでしきりに汗をぬぐいながら、カタカタと揺れる窓枠を見ていた。

赤茶けた砂で四隅が汚れた窓からは、日が傾きだして橙に照らされる砂丘の峰と、太陽が南中している時よりずいぶん濃くなった影、そして砂塵が見えている。そのような光景が地平線の果てまで延々と繰り返され、地表を覆っていた。

夕陽に照されて金色のベールのようにたなびいている砂塵は、何かのアーツのようだ、とプリユムは思った。幾度ともなく任務を共にしたアーツ術師たちの、敵を蹂躪するあの力の奔流が、砂漠自身によって何度も行使されているように見えた。

「夕方になると風が強くなるんだ。熱せられた砂と他の地域との温度差が生まれて、空気の移動が起こる。自然の力って凄いよね」

原理としてはサイフォンと似ている。そう男は語りながら、手元のカップにコーヒーを注いだ。取り上げられたガラス器具が、わずかな音を立てて台へ戻される。

「さすがケルシー先生は分かっているなあ。この豆、ボリバル産の良いやつだ。お土産運んでくれてありがとう」

「あ、いえ、これも任務ですのぞ」

急に水を向けられたプリユムはどきりとして男を見た。どう見てもまだ成人しているようには見えない、それどころか幼くさえ見える少年が、ニコニコとしながらコーヒー豆の袋を眺めている。途中で砂漠に放り出されたせいでやや砂で汚れているが、気にした素振りを見せない。彼はおもむろにコーヒー豆のラベルを剥がし、机の脚に貼り付けた。

ロドスが買い上げて事務所として運営している拠点の一つ、展望タワー12のロビーはかなり雑然としていたが、ギリギリの所で趣味の良い部屋の範囲に留まっていた。

入口付近には水耕栽培のラックが並び、センサーとホースが蔦のように天井へ伸びている。コンクリート打ちっぱなしの床には補修跡だらけのソファアが二つ放置され、ガラスのローテーブルの上にはまるで要塞のように本が積まれていた。がらくたと本の山はそのまま床にも広がっている。傘立てには傘と箒とアーツロッドが突っ込まれており、上からボロボロの何かの旗がかけられている。敷かれたラグもやはり汚れきっていたが、それでも良い仕立ての物であることが辛うじて分かる状態だ。

プリユムは基本的に折り目正しい人物であるが、そこまで潔癖症というほどでもなかった。しかしそれにしてもロドスの事務所と言うにはあまりにも人を歓迎しない空間である。

「汚くてすまないね。ウィーデーがここに来たら失神するか僕をぶん殴って窓から吊るすだろう」

「お知り合いなんですか？」

「エンジニア部とは昔からそれなりに付き合いがあるよ。なにかと喧しいけど嫌いじゃないなあ」

聞きながら、プリユムは任務の前に渡された目の前の男のプロファイルを思い出した。ロドス設立時から在籍の古株。種族はフェリオン。本艦の所属だが、かなり長い間この展望タワーへ外勤に出ている扱いになっている。

「ホワイトノイズさんはずっとここに一人で？」

その男のオペレーター名をホワイトノイズと言った。プリユムがサルゴンへ出向し、護衛に付くということになっている人物の名がこれである。

「うん。手伝ってくれる現地の人は数人いるけどね。オアシスの街の方は優秀な医者もいるし感染者もほとんど出てないから医療支援は必要ない。基本は一人だ」

つまり、君みたいなものだ。

そうホワイトノイズは窓を見ながら言った。

「どういうことですか？」

「ラテラーノ人の見張り番、ロドスでそう呼ばれていたんだろう？」

「それは……前のことです」

プリユムの中でその事実はやや恥ずかしい部類のものだった。

ロドスに到着してしばらく、護衛隊でなくなった自分のありどころに迷い、周囲と交流せずじつと見張りをしていた頃の記憶だ。

別に間違った事ではなかったが、ひどく不器用であった事も今では自覚している。そして迷ってる時の自分の姿を初対面の人間に知られているのは恥ずかしいものである。

ホワイトノイズは少し笑いながらカップへ口をつけていた。というか、プリユムがカップと思っていたものは実験用の耐熱ビーカーだったようで、夕陽に照された目盛りが光っている。

「僕はなにかを見張っている訳じゃないけど、そうだな……ここでずっと立っているんだ。立ちすくんでいると言ってもいい」

「はあ」

「人生の休暇中なんだ」

人生の休暇というのは、つまり無職では？ とプリユムは思ったが、口に出さなかった。

ロドスに勤めている誰しものが、なにかさら人には見えない物を抱えていることはなんとなく察していたし、自分もまたそうだからである。プリユムが抱えているそれは、駄目にしたハルバードの刃先の姿をしていた。

「しかしこうして便りが来るんだから立ちすくんでるのも悪いことじゃないね」

ホワイトノイズは嬉しそうに手元の便箋を手繰っている。プリユムが出発時に託されてきた手紙の束には、様々な差出人の名前が踊っていたが、一枚の封筒を前に手が止まった。

「あ、とうとうロドスにパッセンジャー<sup>エ</sup>君が来たのか」

シンプルな封筒をペーパーナイフで開くと、中から手紙と共に黒いなにかが出てきて、テーブルの上にコロコロと転がる。プリユムは思わず立ち上がった。

「源石!？」

「体内に入らなければ基本的に大丈夫だよ。あの研究のサンプルとは、またとんでもないプレゼントをくれたな。ありがたいありがたい」

ホワイトノイズはポケットから手早く防護用手袋を取り出して欠片をアンプルへ封入する。ガラス管の中で、エネルギーを秘めた鉱石片が淡く光っているのが見えた。一緒に入っていた便箋を見ると、そこには読みやすく整然とした文字で、近況の報告が並べてあった。

「前からサルゴンでやるべきことが終わったらロドスに来ないかと言っていたんだが、どうやらロドスで気に入る人を見つけたらしい。心配していたがひと安心だな」

復讐は終わってからが困るんだよなあ、復讐ロスだよ、と気の抜けた調子で言う彼は、プリユムの目にずっと異様に映っていた。

種族や体質のせいで、体躯が実年齢より幼く見えるオペレーターというのはままいる。だが、目の前の彼――

――ホワイトノイズの場合は、それだけではない。まるで、水面が見えない水瓶を覗き込むかのような、霧深い谷に響く微かなせせらぎの音のような、不思議な存在感を湛えていた。

「こんな大切なものをくれるんだから、ノリで額のあれもくれないかなあ」

プリユムは彼に感じた神秘性について、即座に全てを撤回することを決めた。

ホワイトノイズは、最後に手に取ったケルシーからの板のごとき厚さを誇る手紙に泣きそうな顔をした。それは嘘みたいにくど、くどかつたので、とりあえず二人分のコーヒーを淹れてから読むことに決めた。

日が落ち始め、あんなに熱かったプリユムの体も冷えていく。もうすぐ温かい飲み物が美味しい時間帯が、砂漠にやってくる。